令和四年度入学試験問題

国　語

（教員養成課程）

注意事項

1　試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
2　問題冊子は表紙を含めて八ページです。
3　解答用紙は五枚、下書き用紙は二枚あります。
4　解答は指定された解答欄に記入すること。
5　受験番号は解答用紙の全ての指定欄に横書きで記入すること。
6　解答は縦書きとし、指定された字数にまとめること。句読点や括弧記号等も、一字分とします。
7　解答用紙のみを提出し、問題冊子・下書き用紙は試験終了後、持ち帰ること。**なお、いかなる理由があっても、解答用紙以外（下書き用紙など）は受理しません。**
8　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

徒然草には教科書には載らないものの、ユカイな話、奇妙な話がたくさんあります。ぜひ通読して見つけて欲しいと思います。たいてい表現が極度に切りつめられて、余計なことを書かないので、一見素っ気ないですが、何とも言えない味わいがあります。

たとえば、六八段です。

筑紫になにがしの押領使などいふやうなるもののありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。

ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来りて囲み攻めけるに、館の内に兵二人出で来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してげり。いと不思議に覚えて、「①日ごろここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らにさぶらふ」と言ひて失せにけり。

深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

ある人物が、大根は体にいいのだ、といって毎朝二本ずつ食べていたところ、その大根が二人の勇士となって現れ、ピンチを救ってくれた、という大根の恩返しです。「土大根」はいまの大根と同じものです。「何でも信ずればいいことがある」というのがオチです。

いつの時代とも明記されず、それはどうでもよいほど明快な話ですが、しかし、だいたいその背景が分かるようになっています。主人公は武士とも何とも書いていませんが、その原形のような立場の人と考えてください。まず舞台は筑紫、そして主人公は「押領使」でした。

筑紫は筑前・筑後両国、現在の北九州一帯です。古くから在地の豪族の勢力が強い地域で、しかも遠隔地ですから、当然、国内での対立抗争が非常に激しかった。すると中央から任命された国司としても、地域の警察や治安の仕事は意に任せないわけです。そこで、こうした国々のために、平安時代中期に設置されたのが、「押領使」という役です。これは国司の命により、在地有力者が軍事指揮権を与えられ、奸盗を取り締まり謀叛人のチンアツに当たります。押領使になれば国内で自分と対立する勢力を公然と処罰できることから、この権能を足がかりとして武士団へ発展した例が多いといわれます。権勢に誇るいっぽう、身の危険も大きかったことでしょう。

主人が住んでいたのは「館」ですが、これも、後世の武士の館と同じものでしょう。堀や垣根を廻らし、櫓を建て、防御に適した構造を持ちますか

ら、敵の襲来を予想していたのでしょう。この話、ユーモラスないっぽう、②その外側はなにやら不穏です。兼好は詳しく知らなかったのか、わざとぼかしたのか、「なにがしの押領使などいふやうなるもの」などと書いていますが、これだけで読者は、現代でいえば、「なになに組の親分とかいう人が組の事務所で毎朝大根を二本焼いて……」くらいの受け取り方をしたのだと思います。

兼好は食物が人間と会話する奇譚に関心があったのでしょう、さらに話を続けます。

六九段です。

書写の上人は、法華読誦の功つもりて、六根浄にかなへる人なりけり。旅の仮屋に立ち入られけるに、豆の幹を焚きて豆を煮ける音のつぶつぶとなるを聞き給ひければ、「③うとからぬおのれらしも、恨めしく我をば煮て、からき目を見するものかな」と言ひけり。焚かるる豆幹のばちばちと鳴る音は、「我が心よりすることかは。焼かるるはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。④かくな恨み給ひそ」とぞ聞こえける。

この話の主人公性空(九一〇～一〇〇七)は平安時代中期の高僧ですが、かずかずの奇行で名高い人です。「法華読誦の功」、法華経をたいへん熱心に読んだおかげで(六万回といわれています)、六根、すなわち全身の器官が清浄となり、その功徳で、炊事で煮られる豆と、燃やされる豆殻とが会話するのが聞こえた、というのです。なるほど、徳の高い宗教者ともなると、動植物、あるいは非生物と会話できるという奇蹟は、洋の東西を問わず、よく見かけます。

高僧には、その法力の高さを示す、奇蹟を集めた伝記が作られ、後世喧伝されました。性空にも何種類かの伝記があります。しかし、それらにこの話は見えないようです。というのも、この話、もともと性空の逸話ではないからです。

これは中国魏の詩人、曹植(一九二～二三二)[*1]のエピソードに発するものでしょう。曹植は文帝(曹丕)[*2]の弟で、卓越した文才の持ち主でした。文帝は即位すると、かつて自分の地位を脅かした曹植をハクガイします。ある時、七歩進むうちに詩を作れ、できなければ処刑するとの難題を持ち掛けます。すると曹植は、

煮レ豆持作レ羹、漉レ豉以為レ汁、萁在二釜下一燃、豆在二釜中一泣、⑤本自二同根一生、相煎何太急

(豆を煮て持て羹を作る、豉を漉して以て汁と為す、萁は釜の下に在りて燃え、豆は釜の中に在りて泣く、［　　］。)

※羹……水分量の多い煮込み料理。
豉……豆を加工して作った味噌などの調味料。

という詩をたちまちに吟じ、文帝は大いに恥じた、というものです（世説新語[*3]・文学第四）。これは「七歩の才」といえば作詩の才能を指したくらい、A人口に膾炙した故事です。明らかに性空の伝記とは無関係で、後世にとりこまれたとしか思えません。だいたい豆と豆殻と、血を分けた兄弟が相手をギャクタイ[d]する、というのがこの逸話の肝腎なところです。徒然草ではその点がほとんど生かされていません。

しかも、この話、何もコメントがない。性空の伝記としてはおさまりが悪いのです。すると、兼好は性空を讃美するものではなく、高僧には炊事の音がそう聞こえた、ということをおもしろがっていたようにも見えます。

兼好は、そもそも正式な僧侶ではなく、もとより何も宗教的な実績はありませんが、高徳の僧は無生物の音さえ、有情のものとして聞くことができる、という点に興味があったとすると、一四四段はいかがでしょうか。

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、「あしあし」と言ひければ、上人立ちとまりて、「あなたふとや。宿執開発の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。如何なる人の御馬ぞ。余りにたふとく覚ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。「こはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

こちらは華厳宗中興の祖で、栂尾の高山寺を開いた、明恵（一一七三～一二三二）の逸話です。鎌倉時代前期、旧仏教の立場から活動した高僧で、兼好とも近い時代の人ですが、敬虔苛烈な宗教心の持ち主でした。たとえば日本仏教の堕落に絶望して、はるかインドに渡ろうとしたり、修行に余計だからと、耳を切断しようとして大怪我をしたりと、過激な求道心を持った人として知られています。

ひたすら教学の研鑽に努めた人で、エピソードに事欠きませんが、仏教学の基礎である梵字（悉曇文字）＝サンスクリットには、学問的関心以上の思い入れがありました。「阿」とは、梵字の十二の字母のうち最初の文字です（「吽」が最後の文字です。ア・ウンの呼吸というのもこれです）。梵字は一字一字が諸仏諸尊をあらわし、これを種子（または種字）といいます。密教では「阿」は大日如来を象徴し、「万有は本来不生不滅」という深い真理を含むとしています。

明恵には、「脚」が「阿字」に、「府生」が「不生」に聞こえたというのですが（「アジ」と「アシ」ですが、このような場合は表記だけを問題として清濁は無視

します)、教学を夢中で研究するあまりの、聞き間違いでしょう。「府生」は衛門府などの下級職員で、この場合は宣旨を受けて検非違使となっていた者だと思います。ちょうど京都府警の巡査部長くらいの身分の人です。彼のパトカー(馬)を下人が洗っていたら、妙なお坊さんがやって来て⑥頓珍漢な受け答えを重ねたと考えてみて下さい。「宇宙の真理がここに」と勝手に感動して涙を流す明恵と、たぶんポカンとしている下人と、二人の姿が目に浮かぶようです。

兼好は「感涙を拭はれけるとぞ」と結び、何も語っていません。しかし、その視点は推察できます。決して揶揄はしていませんし、敬意もあったでしょうが、共感とは言い難いと思います。いささか距離を置いて描き出しています。

こうした、かれの視点をまとめるものとして、七三段が興味深いのです。長い段なので最後だけ取り出します。

とにもかくにも、虚言多き世なり。ただ、常にある、めづらしからぬことのままに心得たらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人は怪しきことを語らず。

かくは言へど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるもをこがましく、「よもあらじ」など言ふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

兼好は面白そうな話なんてものは、まず信用できない、とします。たしかに「怪力乱神を語らず」(論語のことばです)と言いたくなります。自分でも怪しいなと思っていても、耳を傾けてもらうために、誇張して、しかしさも真実らしく話すものです。だから「人から聞いた話だが……」といって吹聴するのは要注意でしょう。フェイク・ニュースに踊らされたり流されたりするのは、鎌倉時代でも現代でも変わらないと思わせます。

しかし、徒然草には、⑧どう考えても虚誕としか思えないような、無責任な話を書き留めていたのですから、いまさらこんな綺麗事を語るのはずいぶんな豹変、矛盾ではないか、と思われるでしょう。

たしかにそうですが、兼好は、神仏の起こした奇蹟や、権者の行いを、むきになって否定するのも大人げない、ともします。「権者」とは、高徳の僧を指して、衆生を導くために、神仏がかりに現世に人間の姿で現れたとするものです。性空や明恵はまさにそういう存在です。権者の権者たるゆえんは、さまざまな奇蹟でした。カトリック教会における聖者[*4]・福者の認定(列聖・列福)にも、奇蹟の報告が必要ですが、こんなものは疑っていたらきりがありませんし、無用の論争を惹き起こすだけです。性空や明恵の逸話も、ファナティック[*5]な宗教心の起こした聞き違い、ということになってしまうでしょうが、そんなことを言っても何も生産的なものは生まないでしょう。

中世にあっては不信心者ともいえる兼好ですが、そのヒッチにかかると、かえって取り上げられた宗教者の像は生き生きとしていると感じます。対象との適度な距離によって、また余計なコメントをほとんど附さないことで、一途の宗教心の強さのなせるわざを描き出し、その反面の危うさまで、かれは意図しなかったながらも、見事に提示していると思います。

（小川剛生『徒然草をよみなおす』、筑摩書房、二〇二〇年刊による。一部改変。）

注　＊1　曹植……曹操（一五五～二二〇）の第三子。父に愛され相続を争ったことから、兄の曹丕に憎まれた。

＊2　文帝（曹丕）……魏の第一代皇帝。在位二二〇～二二六。

＊3　世説新語……中国南朝宋の書。「徳行」「文学」などの項目を立て、歴代の人物の逸話をまとめている。

＊4　聖者・福者……カトリック教で、偉大な殉教者や信徒と認められた者。福者は聖者に準ずる。

＊5　ファナティック……熱狂的なさま。狂信的なさま。

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字で書きなさい。（四点×五＝二〇点）

問二　傍線部A「人口に膾炙した」、B「揶揄」の意味をそれぞれ書きなさい。（五点×二＝一〇点）

問三　傍線部①「日ごろここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」を現代語に訳しなさい。（一〇点）

問四　傍線部②「その外側はなにやら不穏です」とありますが、どのような点が「不穏」なのか、「外側」とは何かを明らかにしながら、五〇字以上六〇字以内で説明しなさい。（一五点）

問五　傍線部③「うとからぬおのれらしも」について次の問いに答えなさい。（一〇点）

（一）　二重傍線部「し」を次の①・②の例にならって、文法的に説明しなさい。（五点）

（例）　問ひけれ①ば②

①過去の助動詞「けり」の已然形　／　②確定条件の接続助詞

（二）　二重傍線部「し」と同じものを、次の選択肢ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。（五点）

ア　藤のおぼつかなきさましたる

イ　折しも雨風うち続きて

ウ　…と言ひしもいみじく覚えしなり

エ　…と言ひしもいみじく覚えしなり

問六　傍線部④「かくな恨み給ひそ」を現代語に訳しなさい。（一〇点）

問七　傍線部⑤「本自同根生、相煎何太急」について、次の問いに答えなさい。（二〇点）

（一）　これを書き下し文にしなさい。なお「煎」は「にる」と訓じます。（一〇点）

（二）　この部分を現代語に訳しなさい。なお「急」は「激しい」という意味です。（一〇点）

問八　傍線部⑥「頓珍漢な受け答え」とありますが、どういう点で「頓珍漢」なのか、六〇字以上八〇字以内で説明しなさい。（三〇点）

問九　傍線部⑦「論語」について、次の語句をすべて用いて、五〇字以上六〇字以内で説明しなさい。（一五点）

言行録　　儒家　　四書

問十　傍線部⑧「どう考えても虚誕としか思えないような、無責任な話」について、次の問いに答えなさい。（六〇点）

（一）　筆者は、「どう考えても虚誕としか思えないような、無責任な話」に対して、兼好がどのように向き合っていると考えているか、八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。（二〇点）

（二）　（一）で答えた兼好の向き合い方について、あなたはどのように考えるか、具体例を挙げながら二五〇字以上三〇〇字以内で述べなさい。（四〇点）